

令和5年度入学 総合政策学部 学校推薦型選抜 試験問題の出典

種別	大問 番号	著者名	著作物名	書名等	版元
総合 問題	資料A	朝日新聞 (青森県 版)	世界遺産の功罪 観光と自然保 護両立に悩む (白神は今:2)	朝日新聞(青森県版) 2005年1月3日付朝刊 一部改変 ※朝日新聞社に無断で転載 することを禁じる 承認番号23-1311	朝日新聞社
	資料B 図1	青森県	～2009年:青森県観光統計概要 2010年以降:青森県観光入込客 統計	図1 世界自然遺産白神山 地の観光客数の推移 ※白神山地観光客数:西目 屋村の観光客数とした	青森県
	資料B 表1	藤野 眞子 奥野 希美 中村 颯 森 恵実	世界遺産の環境保全政策ー観光 と保全の両立を目指してー	表1 白神山地の経済効果 2016年 P22 表6より ISFJ2016 政策フォーラム発表論文	明治大学 千田亮吉ゼ ミ
	資料C	朝日新聞 (青森県 版)	白神山地と世界遺産 生活の場 (20世紀の記憶:7) /青森	朝日新聞(青森県版) 2000年1月9日付朝刊 一部改変 ※朝日新聞社に無断で転載 することを禁じる 承認番号23-1311	朝日新聞社
	資料D	朝日新聞 (青森県 版)	生かせ!グリーンパワー 第3部 観光新時代:5 可能性を秘め る白神	朝日新聞(青森県版) 2010年9月18日付朝刊 一部改変 ※朝日新聞社に無断で転載 することを禁じる 承認番号23-1311	朝日新聞社
	資料E	根深 誠	白神山地マタギ伝 鈴木忠勝の生 涯	2018年 P76-78より 一部改変	山と溪谷社

総合政策学部

総 合 問 題 (120分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、8ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

資料 (A) ~ (E) を読み、次の1から5の設問に答えなさい。

- 1 資料 (A), (B) より、世界自然遺産が地域社会（ここでは広く、白神山地のある青森県・秋田県、白神山地の周辺自治体・集落を指している）へもたらすメリットを200文字以内で具体的に述べなさい。
- 2 資料 (B) の表1より、世界自然遺産登録前の1990年の青森県・秋田県の観光消費額の合計が、世界遺産登録後の1995年には何倍になったのかを計算しなさい。ただし、小数点第3位を四捨五入し、小数点第2位まで答えなさい。
- 3 資料 (C) の下線部 a にみられるように、白神山地保護のために入山規制をとった考え方に対して、白神山地を生業の場にしてきた地域住民は違和感を表明している。この違和感をもつ根拠となっている地域住民の経験とはどのようなものか。資料 (C) を読み、100字以内で述べなさい。
- 4 資料 (D) には体験型エコツーリズムの例として、マタギから自然との共生を学ぶツアーが挙げられている。このツアーのガイド役は、資料 (E) の下線部 b の「観光マタギ」と同じと考えられる。「観光マタギ」と「伝承マタギ」の大きな違いについて、資料 (E) の著者はどのように考えているか。200字以内で述べなさい。
- 5 資料 (A) ~ (E) を参考にして、白神山地の事例から、世界自然遺産が地域社会へもたらすメリット・デメリットを簡潔に整理し、一般的な世界自然遺産にかかわる地域政策において、あなたがもっとも重要視したい点をその根拠とともに、600字以内で述べなさい。

資料 (A)

1993年12月。白神山地¹⁾は日本で初めての世界自然遺産に登録された。

「これで青森のシンボルができた」。当時、県自然保護課長は登録時にこう思ったという。白神は登山道が険しく、登山口へ通じる道路も少ない。山で生活しているマタギ²⁾や一部の登山者、釣り人しか入ってこない場所だった。だが、世界遺産になれば知名度が上がり、多くの観光客が訪れる。観光の起爆剤にしたいと考えた県や周辺自治体は、次々と白神関連の観光施設を作った。

世界遺産登録の効果は絶大だった。西目屋村の暗門の滝を訪れる観光客は遺産登録から3年後には年間約15万人に倍増。滝の入口にある総合レジャー施設「アクアグリーンビレッジANMON」はオープンした1994年に約900人だった利用者が、1998年には約6万人にまで膨れあがり、現在(2005年)も約5万人が訪れる盛況ぶりだ。

滝へ通じる道路には大型観光バスが列を作り、首都圏の旅行会社では白神山地関連のツアーに人気が集まった。だが、ほどなく観光客のマナーの悪さが問題になる。ツアー客が捨てた大量のゴミが山を汚し、山登りには向かない軽装で訪れる観光客も多かった。県には「山に観光客を入れるな」と苦情が殺到、県などで作る協議会は1997年に27本の登山道だけに入山を限定した。

最近ではペット連れで訪れる人も増加。「ペットではなく家族だ」と開き直す観光客もいる。県は2003年9月、暗門の滝入り口の2カ所に「ペット連れ込み禁止」の看板を設置。担当者は「こんな看板を立てなければならぬのが恥ずかしい」。さらに、新緑や紅葉の季節に観光客が集中するため、登山道の老朽化なども懸念されている。溪流沿いでは大雨が降ると川の水が歩道まで届き、歩道そのものが崩れる危険性もあるという。

東北森林管理局の自然遺産保全調整官は「安全を優先するならコンクリートや鉄骨の歩道が一番だが、景観と合わないという声もある。自然の状態を保ったまま安全を確保することが今後の課題」と話す。

「世界遺産になってから山が変わってきた」。西目屋村でガイドをしているAさんも観光と自然保護の両立に頭を悩ませている一人だ。15歳からマタギとして白神を歩いてきたが、禁猟になったため白神のガイドを始めた。昨年(2004年)の夏。例年なら暗門の滝に大量発生するアブがいないことに気づいた。観光客は歩きやすくなったと喜んだが、少しずつ生態系が変化しているのではないかと不安になった。核心地域³⁾に入ると、ゴミを燃やしたたき火の跡を見かける。昔は手で捕まえられるほど多かったイワナは、密漁者が増えて数が減った。観光客の増加で生活は安定したが、見慣れた山は少しずつ姿を変えていると感じるという。

Aさんはできるだけ冬場の案内を増やし、観光客を分散させるよう工夫している。冬場は雪の上を歩くため、直接、山の地面を踏み荒らすことはないからだ。

※注

- 1) 白神山地は、秋田県北西部と青森県南西部にまたがる約13万ヘクタールに及ぶ広大な山地帯

の総称。世界最大級の原生的なブナ林が分布し、この中に多種多様な動植物が生息・自生するなど貴重な生態系が保たれており、1993年12月に世界自然遺産に登録された。

2) 山野で獣を狩り、その肉や、皮や、その他の資材を利用する事で生計を立てる人の事を猟師という。狩猟は世界的にも最古の生業のひとつだが、特にマタギという場合、独自の文化とともに技術を磨いてきた日本の山奥の猟師たちとその文化のことを指す。

3) 白神山地の核心地域とは、人の入り込みにより自然環境への影響が生じないように入山を規制している地域である。核心地域への入山方法について、青森県側では指定された27本の登山道の許可制、秋田県側では原則入山禁止を決めた。

『朝日新聞（青森県版）』2005年1月3日付朝刊、「世界遺産の功罪 観光と自然保護両立に悩む（白神は今：2）」より、一部改変

資料（B）

以下は、①を基に世界自然遺産・白神山地の観光客数の推移と経済効果を示した図表である。

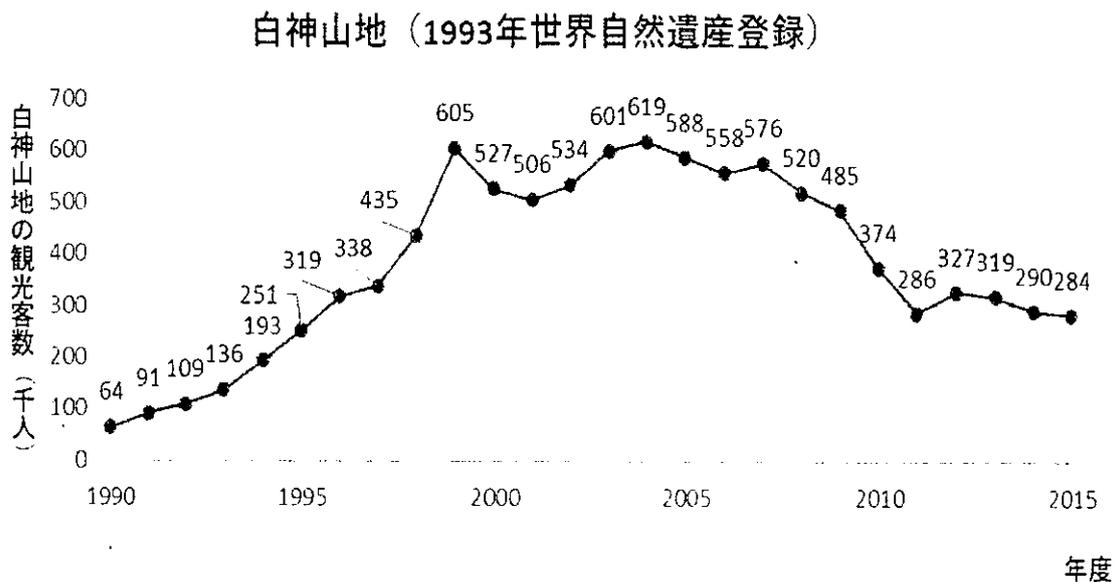


図1 世界自然遺産白神山地の観光客数の推移

①白神山地の観光客数は、西目屋村の観光客数とした。統計資料は、2009年までは青森県観光統計概要を、また、2010年以降は青森県観光入込客統計を利用した。

表 1 白神山地の経済効果

(万円)

	観光消費額	登録前 (1990) 経済効果	登録後 (1995) 経済効果
青 森 県	宿泊費	7,262	24,155
	域内交通費	7,080	22,462
	買物・土産品費	5,424	17,272
	その他	13,621	45,305
	計	33,388	109,194
秋 田 県	宿泊費	6,034	18,747
	域内交通費	6,533	20,347
	買物・土産品費	4,560	13,713
	その他	11,316	35,162
	計	28,443	87,969

(表 1: 藤野眞子・奥野希美・中村颯・森恵実「世界遺産の環境保全政策—観光と保全の両立を目指して—」, ISFJ2016, 政策フォーラム発表論文, p.22 表 6 をもとに作成)

資料 (C)

- ① 白神山地は、青森県（鱒ヶ沢、深浦、岩崎、西目屋の4町村）と秋田県にまたがる約13万ヘクタールに及ぶ山地帯の総称。最高峰の向白神岳で標高1,243メートルと1,000メートル前後の比較的低い山並みだが、地形は谷が入り組んでいて険しい。

このうち中心部の16,971ヘクタールが1993年12月、世界でも最大級のブナ原生林が分布し貴重な生態系が保たれているとして、日本初の世界自然遺産に登録された。

これに伴い、環境庁、青森・秋田両県、青森・秋田両営林局（当時）などでつくる「白神山地世界遺産地域連絡会議」は、核心地域（約1万ヘクタール）への入山方法について、青森県側では指定された27本の登山道の許可制、秋田県側では原則入山禁止を決め、1997年7月から試験的に実施している。

- ② 鱒ヶ沢町を流れる赤石川は、世界遺産・白神山地に発して日本海に注ぐ。川沿いに上ると、霧が垂れ込めるブナの山並みが間近に迫り、山里の家々からは糸のように煙がたなびく。その奥の

山陰に、目指す温泉旅館があった。

温泉旅館を経営する B さんは赤石川、追良瀬川流域を猟場としてきた赤石マタギのシカリ（頭領）の血を受け継ぐ 21 代目。曾祖父は「クマ狩りの名人」で、やりを使って一日 6 頭の大クマを仕留めたという。

B さんもマタギとして育った。今も水田約 3 ヘクタールを耕すかたわら、クマを狙って一人で春山に入る。夏はアユ漁、秋はキノコ採り。自然の恵みを糧にした暮らしに大きな変化はない。

その B さんが、顔をしかめて言った。

「ただの山が、ある日突然、世界遺産になった。木を切られなくてよかったと思ったら、自由に入れなくなった。入林許可証だと。じょうだんじゃない」

子どものころからマタギの厳しいおきてに生き、山が生活の一部だった B さんが「自然保護運動」に初めて触れたのは、白神山地のブナ原生林を縦断する「春秋林道」建設の是非を巡る行政と自然保護団体の論争が山場を迎えた 1987 年秋のことだった。

自然保護団体は工事予定地の下流に当たる赤石川流域で、この年 10 月、直接の利害関係者の住民らに「異議意見書」への署名を呼びかけた。最初の集会は流域最奥にある鯉ヶ沢町一ツ森地区で開かれ、B さんも参加。真っ先に「建設反対」の声を上げた。

自然保護団体は集会を重ね、最終的に 1 万 3,000 通を超える異議意見書を集め、春秋林道を建設中止に追い込んでいった。

「木を切る林道は要らない。生活の場としての山と、赤石川の水を守れ、と訴えたかった」

B さんは署名の動機をそう振り返る。

ところが事態は B さんにとって意外な方向に進んだ。1993 年 12 月、白神山地の世界遺産登録が決まると、国や青森・秋田両県は赤石川源流部を含む「核心地域」への入山を規制、狩猟どころではなくなった。

④「代々山で生活してきて、白神に迷惑を掛けたことなどない。世界遺産は地元住民を閉め出すものなのか。昔からの生活習慣を含めて地域とともにあるのが世界遺産ではないのか」

山を隔てた西目屋村は、白神山地の「表玄関」と呼ばれる。登録地域のふもとの川原平地区で、マイタケ栽培を営む C さんは、3 年ほど前までマタギをしていた。こことすぐ下流の砂子瀬地区は目屋マタギの里として知られる。C さんは 10 代から 50 年近くも山に入っていたが「獲物が少なくなって」、愛用の猟銃を手放した。

「このあたりの山は足のつかない所のないくらい歩き回った。山のすべてを知っていないと商売にならないからな」

クマは 200 頭ぐらい仕留めた。15 年前には一頭 50 万円。胆のうは 20 万円以上、皮もよく売れた。テン^④の売値も高かった。春のクマ撃ちとゼンマイ採り、夏の木材流し、秋のマイタケ、ナメコ採りで 1 年分の生活費を稼いだ。出稼ぎより、白神に入った方がよほど金になった。

「白神が世界遺産になって、山で生計をたてている人たちは飯が食えなくなった。私の所も、

マイタケ栽培のおがくずをロシアやアメリカからの輸入に頼っていて、虫の消毒に何倍も手間がかかる。今にキノコ屋もなくなるよ」

BさんもCさんも白神山地の豊かな自然が将来に受け継がれていくことに異存はない。ただ、行政と都市部の自然保護団体の人たちが頭の上で論議しているうちに「豊じょうの山」が遠のいてしまった。

「役人は学者の話ばかり聞いて、山のことをよく知っている地元の人の話は聞かないな」
釈然としなげな表情で、Cさんがつぶやいた。

※注

4) テン・・・哺乳綱ネコ目（食肉目）イヌ亜目 イタチ科テン属に分類される食肉類

（『朝日新聞（青森県版）』2000年1月9日付朝刊、「白神山地と世界遺産 生活の場（20世紀の記憶：7）／青森」より、一部改変）

資料（D）

青森県観光企画課は白神山地の活用に及び腰だった。「観光振興に取り組みたくても環境保護の切り口もありかわりにくかった」と打ち明ける。

県の姿勢が明確に変わったのは2010年度だ。東北新幹線全線開業が迫り、県自然保護課が「規制一辺倒から自然の活用を考える時」として、白神にふさわしい体験型エコツーリズムを探る事業をスタートさせた。

その柱の一つが、「白神の自然を学ぶ」というテーマ。県は地元観光関係者に地元の魅力を聞く会を鱒ヶ沢町と深浦町で開いた。(1) マタギから自然との共生を学ぶ (2) 海で漁船から海と白神の関係を学ぶ (3) サケの川上りを見る (4) サルを見て白神の生態系を学ぶなど、自由に意見を出し合った。

県から事業を委託された財団法人日本交通公社の主任研究員は「環白神」をキーワードに挙げる。西目屋村、鱒ヶ沢町、深浦町の白神3町村が一緒に考える取り組みがこれまで少なかったといい、「暗門の滝、ミニ白神、十二湖や海を連携してPRするチャンス」と見る。

実は、学びをテーマにした取り組みは細々ながら白神に点在している。「少しでも長く滞在して白神を理解して帰ってほしい」と話すのは、マタギ歴54年のAさん。ガイドをしながらマタギの精神文化や白神の生態系を伝える「白神マタギ舎」の代表だ。その取り組みは2006年度、環境省が主催するエコツーリズム大賞の優秀賞を受けた。

観光客一人ひとりとしていねいに話ができるようツアーは少人数に限る。

「クマは森の恵み。苦しませたらいけないから1発で仕留めるんです」。8月中旬、愛知県から来た中年の5人組には、自らの経験を話しながら暗門の滝などを4時間かけてガイドした。白神マタギ舎では、マタギ小屋に泊まるツアーや、冬場のウサギ猟同行ツアーなどとし、世界遺産の核心地域にも

連れていく。Aさんは「何千年も人の手が入ったことのないブナの原生林は、木の太さが他の森と違う。それを壊さず付き合ってきたマタギの文化を知り、自然を守る意味を考えてほしい」と話す。

（『朝日新聞（青森県版）』2010年9月18日付朝刊、「生かせ！グリーンパワー 第3部 観光新時代：5）可能性秘める白神」より、一部改変）

資料（E）

この部分の問題は、著作権の関係により公開できません。

(根深誠『白神山地マタキ伝 鈴木忠勝の生涯』, 山と溪谷社, 2018年, pp.76-78より, 一部改変)